

認知症の人にどう接したらよいか、悩む介護職員は多い。認知症ケアの先進国・スウェーデンの介護方法を取り入れ、そのノウハウを日本でも生かそうとする現場を訪ねた。

(内田健司、写真も)

千葉県浦安市のJ.R新浦安駅から車で5分余り。住宅街の一角に、薄緑色の壁に真っ白な柱や窓枠が一際映える、ヨロップ風のテザインの建物がある。介護付き有料老人ホームと認知症デイサービス、小規模多機能型サービスが一体となった、高齢者複合施設「舞浜俱樂部新浦安」だ。

(35)が総支配人を務めている。ここでは、「親孝行のお手伝い」を理念に、「認知症になっても安心して暮らせる環境づくり」に力を入れている。今年1月からは、スウェーデン生まれのグスタフ・ストランデルさん

◇タクティールケアについては、「タクティールケア入門」(1200円、税別。日経BP企画)参照。「日本スウェーデン福祉研究所」(東京都港区、0120・294・019—平日午前9時~午後6時)では普及にあたっている。
◇グスタフ・ストランデル著「私たちの認知症」(1000円、税別。幻冬舎)。

利用者と「ブンネ楽器」の演奏を楽しむ総支配人のストランデルさん(奥)(千葉県浦安市の舞浜俱樂部新浦安で)



楽器演奏で達成感

スウェーデンの手法 介護現場に

「タクティールケア」の理念を持つことが欠かせない。現場の人間が「共生」の意味をよく理解して、実践することが何より大切だ」と話している。



認知症ケア「共生」の知恵

＊ ストランデルさんは、日本の高校、大学への留学経験などを通じ、日本では「スウェーデンは福祉の国」と呼ばれていることを知り、母国の高福祉を再認識。2003年に東京でスウェーデン福祉研究所長に就任し、日本各地の介護施設を訪ねるうち、母国では現場で徹底されている「個人に合わせたケア」を普及させる必要性を痛感した。

舞浜俱樂部では、スウェーデンで実践されている認知症ケアのうち、「ブンネ楽器」という専用開発された楽器を用いた音楽療法や、「タクティール」と呼ばれるマツサイジ法などを取り入れている。

ブンネ楽器は、ギターのような形をした楽器のことで、大きめの文字と色で3段階のキーが示してあり、レバーを押さえれば簡単に演奏できる。徐々に身の回りのことができなくなっていく不安をもつ認知症の人が、「自分にも演奏できる」という達成感を味わえるのが魅力だ。ストランデルさんが十八番の演歌、「雪国」を演奏しながら歌うこともある。「演奏を楽しむと同時に、脳を活性化させる効果も期待できる」と強調する。

＊ スウェーデンでは、年をとっても障害をもつても普通に暮らす「ノーマライゼーション」の理念が普及しており、舞浜俱樂部でも、地域のきわが感じられる場所、地域の人たちと密着しながら暮らしていくことに力を注いでいる。今年6月には、母国の「夏至祭」をまねたイベントを企画し、利用者と近隣住民らとの交流を深めた。

事例も多い。

1984年に全国で初めて認知症専門病院を開設した「きのことスボール病院」(岡山県笠岡市)でも、関連の施設を含めて、スウェーデンで研修した約30人の職員が働いている。

佐々木健院長は「個別ケア」とも、形だけまねてもダメ。認知症になっても一人の人間として生きていくというノーマライゼーションの理念を